

レースって良いよね

第19回「愛する二人、別れない二人」の巻

またしてもレースとは直接絡まない話題になりそうだ。ま、いっか。

先日、兄のように慕っている人物と飲む機会に恵まれた。実は彼はかつて教習所へ通う私にバイクを教えた教官でもある。以来、公私共に仲良くしている。

兄イは風の吹くまま気の向くまま、趣味の山登りに精を出している根っからの自由人で、山好きがこうじて日本アルプスのふもとに遠路はるばる京都から居を移し現在は山梨在住である。

これがまた偶然なのではあるが、アメリカから私が帰国し、御殿場へ越すことになったのと同時期にまた同じ様に隣県に現れ、つまりお互いこの2年間を同じ様な地方で暮らしていたことになる。

それはともかく、兄イは妻帯者である。いつも思うのだが、この二人は良く喧嘩している。私が横に居てもお構いなしだ。正確には、嫁の攻勢に兄イはタジタジで言い返せない状況だ。はっきり言って立場が弱い。

やれ地図の見方が悪いだの、やれ洗い物を運べだの、とにかく微笑ましい痴話喧嘩ぶりである。強い嫁の尻に敷かれ少々不満の表情も見せてはいるが、何だかんだ言いながらもしっかりと言うことを聞く兄イを見ていじらしさを感じるのである。

一見すれば嫁が権力者のようにも見えないではないが、果たしてホントの所はこの二人は極論すれば仲よし夫婦だと思うのだ。

何せ、これだけ自由の道を進むために職を犠牲にし、故郷も離れ、尚且つここまで兄イと共に寄り添っているのだから、例え日常の些細なことは嫁が主導権を握っていたとしても、その実、二人の方向性を握る鍵はやはり兄イ本人が持っているらしい。

私はこんな二人の痴話喧嘩を垣間見る度に、両者に深く築き上げられた信頼関係を見て取ることができ、また本当に羨ましく思うのである。

ところで、兄イは面倒見のいい人でもある。ただし、勝手に一人で盛り上がって、奔走した満足感で本来の目的を忘れてしまうというイタイ一面を持っている。

はなはだ困ったものなのだが、憎めない所が人徳というやつなのか。嫁の気持ちも分からんではない。そして今日もまたバリバリの関西弁全開で周囲の失笑を一身に受けながら自由に生きているのだろう。この2年の間、車で1時間ばかりの距離ということもあり、精神的にまいっている時などよく構ってもらった。御殿場を去る今、気軽に兄イに会いに行けなくなることが少々心残りとなっている。